

籠釣瓶花街酔醒

かみのめぐみわごうのとりくみ

神明恵和合取組

かみのめぐみわごうのとりくみ

菊池明

編著

kabuki on-stage 7

白水社

籠釣瓶花街醉醒
神明恵和合取組

歌舞伎オン・ステージ7

一九八六年四月二五日 印刷
一九八六年五月五日 発行

編著者 ©菊池 明

装丁者 平野甲賀

発行者 高橋 孝

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三二四
電話 営業部〇三二九一七七八二一
編集部〇三二九一七七八二一
振替東京九一三三三二八 一〇一

印刷

三秀舎・東京美術

製本

加瀬製本所

Printed in Japan

ISBN4-560-03277-7

¥1900-

編著者略歴

菊池 明(さくち あきら)

一九二三年生

早稲田大学文学部卒

早稲田大学演劇博物館員

早稲田大学教育学部講師

籠釣瓶花街醉醒
神明恵和合取組

菊池

明
編著

監修

郡司正勝

廣末保

服部幸雄

小池章太郎

諏訪春雄

凡例

- 一、本巻所収の作品の底本は、巻末の解説中の「底本」の項に記載される。
- 一、作品の表記は現代仮名遣いに改めてあるが、「ノ・々・々」などの踊り字はそのまま採り入れた。難読字には適宜ルビを付す。
- 一、台本用語集Ⅱ各巻共通に用いられる用語の注釈を前後の見返しに掲げる。脚注に「Ⅱ用語集」とあるのは、「Ⅱ」の注釈を参照せよ」の指示である。
- 一、梗概Ⅱ各作品の荒筋を一括して巻頭に掲げる。
- 一、脚注Ⅱ注番号は、見開きページを単元として数え、語の肩に付ける。
- 一、芸談Ⅱ古今の名優による芸談を作品に即して引用・抜粋して掲げる。
- 一、解説Ⅱ「通称・別題」「初演年月日・初演座」「作者」「初演の主な配役」「題材・実説」「鑑賞」「底本」などを内容とする解説を一括して巻末に掲げる。

二 目 次

[illegible]

梗概

籠釣瓶花街酔醒かごつるべさとのえいざめ

序幕 吉原夜桜見初の場合 野州の絹商人佐野次郎左衛門は商用で下男の治療を連れて、はじめて江戸へ来たが、そのついでにかねて話に聞いた吉原仲之町の夜桜の賑わいを一目見ようとここへ足を向ける。田舎者のふたりはたちまち、悪い客引につきまとわれるが、仲之町の引手茶屋立花屋長兵衛に助けられる。

折から二人は、いま全盛の花魁兵庫屋の八ッ橋の道中姿に逢い、その美しい姿態と自分に向けられた艶然たるほほえみに、次郎左衛門は身も魂も奪われてしまう。

二幕目 仲之町立花屋の場合 以来、次郎左衛門は足繁く吉原に通いつづけ、田舎者の上にあばたづらという男ではありながら、金の使いっぷりのよいところから、佐野の大尽とよばれ、八ッ橋の身請けにまで話がすすむ。

この噂を聞きこんだならず者の釣鐘権八は、以前八ッ橋の父親の中間ちゅうげんだった関係から、八ッ橋が吉原へ来たときに親代りになったのいいことに立花屋へ金をせびりにくる。しかし、これまでの度重なる金の無心に、長兵衛夫婦もきっぱり断わるので、権八は仕方なく悪態をつきながら引上げてゆく。

同 大音寺前浪宅の場合 金を断わられた権八は、その腹いせに、その足で八ッ橋の情人繁山栄之丞の浪宅へやって来て、八ッ橋の身請けの話をし、栄之丞を言葉巧みにたきつける。これを聞いた栄之丞は、いてもたってもいられず、兵庫屋の八ッ橋の許にかけつける。

同 江戸町兵庫屋の場合 八ッ橋に逢った栄之丞は、女の不実をなじり、取交わした起請を返せとせまり、

権八もあらわれて、共に八ッ橋をせめる。八ッ橋は佐野に身請けされる氣持のないことをしきりと訴えるが、榮之丞は承知せず、今夜座敷で佐野に愛想づかしをしたら、その疑いを晴らしてやろうとせまる。八ッ橋はこれまでひいきにしてくれた次郎左衛門に、ためらいを感じながら、榮之丞の強い口調に、しかたなくこれに同意する。

八ッ橋の部屋では、いまや八ッ橋を身請けとうきうきしている次郎左衛門は、得意満面、自分の遊びなれた大尽ぶり、また相方の八ッ橋の美しさを見せようと、同郷の丹兵衛、丈助を案内して部屋に上がり、八ッ橋の来るのを待っている。しかし、やがてあらわれた八ッ橋は意外にも次郎左衛門を冷たくあしらひ、身請けばなしをきっぱり断わる。思いがけない愛想づかしに、満座のなかで恥をかかされた次郎左衛門は、こみ上げる怒りを必死に堪え、悲痛な恨み言をいう。が、ここでちらりと見えた榮之丞の姿に、はっと気付く次郎左衛門に対し、八ッ橋はあれこそ自分の間夫だといって部屋を出てゆく。

思いがけないこの場の展開に、丹兵衛や丈助があざけりの言葉を残して帰ったあと、治六とふたり残った次郎左衛門は、亭主の長兵衛の慰めに、はつきり身請けは思いとどまった、「振られて帰る果報者とは、わしなことをごぞいましょう」と、国へ戻るといつてしおしお座を立つ。

大切 立花屋見世先の間 いったん帰国した次郎左衛門は、自分の土地を義兄に譲り、下男治六の身のふりかたを定め、すべてを整理し、妖刀籠釣瓶（水もたまらぬ切れ味という意味から名付けられた）を携えて江戸へ引返す。

暮もおしつまった立花屋の店先。あれ以来全く姿を見せない次郎左衛門を皆が氣の毒がっているところへ、ひょっこりその次郎左衛門があらわれる。長兵衛は、今は八ッ橋も悪かったと悔いていると伝えたので、次

郎左衛門もころよくハッ橋を呼んで欲しいと二階へ上がる。

同 二階ハッ橋殺しの場 店の者の氣遣いにたいして、次郎左衛門は花魁は売物買物だ、身請けは断わられれば仕方がない。今は何んとも思っていない、それよりこの吉原がなつかしくやってきたとおだやかな態度である。

そこへハッ橋があらわれ詫びるのを、次郎左衛門は今日を初会とし、あらためて馴染になろうと機嫌よく、これからちよつと内証で話があると一同を遠ざける。二人きりとなると、次郎左衛門は急に態度が変わり、ハッ橋に遺恨のたけを述べ、籠釣瓶の刀を抜きはなして、これを斬り殺す。

同 大門口捕物の場 あと次郎左衛門は妖刀の魔力につかれたように次々と人を切りまくるので、廊中は大騒ぎとなる。栄之丞も権八も知らせをきいて駆けつけたがこれも立回りの末、次郎左衛門に斬られる。

しかし大勢に取囲まれた次郎左衛門はもうこれまでと観念して、素直に縛につく。

神明恵和合取組
かみのめぐみわじょうのとりくみ

序幕 品川嶋崎楼の場 新春に賑わう品川嶋崎楼の見世先。次々と常連の鳶の者や力士がくりこんでくる。ここ品川の手を見晴す座敷では、鳶の者の「め組」の辰五郎、藤松、亀右衛門らが遊び、隣あわせた座敷には力士の四ツ車大八、勇野、荒浪らが酒を吞んでいた。が、力士らが酔っぱらって角力甚句を踊り、よろけた拍子に障子を倒し、それが隣座敷の藤松にあたってしまう。

これまで傍若無人な騒ぎに虫をこらえていた藤松は、力士に向って啖呵を切り、これに四ツ車が応じたと

ころから、鳶と力士の間で喧嘩が起きそうになる。しかしその座敷には、辰五郎が出入屋敷の侍葉山九郎次、三池八右衛門がいたので、辰五郎は無念ながら皆をなだめ、じっとこらえてこの場を納める。

同 八ツ山下夜明けの場 どうにか納めはしたもの、憤懣やるかたない辰五郎は八ツ山下の海岸で、四ツ車らを待ち伏せして仕返しをはかったが、暗闇の中で果たすことができず、折から駕籠で来あわせた焚出しの喜三郎に自分の煙草入を拾われる。

二幕目 神明芝居木戸の場 こうした両者の不穏な空氣のなかで、芝神明社の境内では二月五日から花角力が行われた。ちょうどその頃芝居も興行していて、鳶の者の亀右衛門や長次郎が見物しており、またちょうど角力も打出しになったため、力士たちも見物に来了。折から芝居小屋で酔っぱらいが騒ぎを起こし、これを外へ連れ出そうとした長次郎、亀右衛門を、力士の九竜山らがとめたことから口論となり、辰五郎も駆けつけ、また屋敷方の葉山九郎次も力士を応援するので、再び辰五郎と四ツ車との間で喧嘩の華が咲きそうになる。

しかし、この場も小屋の座元喜太郎の頼みで、双方は引くことは引いたが、遺恨はますます深くなっていた。

三幕目 数寄屋河岸焚出内の場 重なる遺恨に、命をかけての仕返しを決心した辰五郎は、女房お仲の仲人役だった焚出喜三郎の家を訪ねて、これから甲州の身延山へ五重塔の修復のため足場をかけにいく、これにはかなり危険な仕事だから、女房子供のことを頼むとそれとなく別れを告げる。

喜三郎は早くもこれを見破って、では銭別にやるものがあると、八ツ山下で拾った煙草入をさし出し、自分がこれを拾ったことを話し、無駄な喧嘩をやめるよう意見する。辰五郎も本心を明かすので、喜三郎は辰

五郎に酒、肴をもてなし帰宅させる。

辰五郎の女房お仲はちょうど喜三郎の家を訪ね、この話を立聞きしてしまう。

同 浜松町辰五郎内の場 辰五郎の身を案じその帰宅を待っているお仲の許に、辰五郎は酒に酔って帰るなり寝ようとする。その姿をみたお仲は、もう仕返しをする気がなくなつたのかと、夫のふがいなさをなじるので夫婦のいさかいとなる。折から亀右衛門も立聞きしていて、その中に入って辰五郎の卑怯さを責める。辰五郎はそれにはとりあわず、酔醒の水だといってそれとなく女房子供と水盃を交わす。

お仲はそれと気付かず離縁をとつて、家を出ようすると、辰五郎は呼びとめて、かねて用意の離縁状を渡し、はじめて自分の決意を明かし、今晚角力の打出しを待ちうけて、仕返しする気だと語るので、お仲は亀右衛門と共に嬉し涙にくれる。

折から芝の七つの鐘がなり、時刻はよしと辰五郎は火事場ごしらえもかいがいしく、勇んで飛び出してゆく。

四幕目 神明町鳶勢揃の場 芝神明の普請場の空地ではかねて手配の通り、鳶の者火事場ごしらえに身を固め、めいめい鳶口、手かぎ思い思いの得物をもって勢揃いをして辰五郎の来るのを待ちかねている。血気のはやる者は辰五郎を待たず繰り出そうとするとき、辰五郎が鳶口をもって駆けつけ、皆々と水盃を汲み交わし、半鐘をうち鳴らし、角力場へ押しかける。

同 角力木戸前喧嘩の場 角力場では、これを知つた力士たちが待ち構えており、鳶の者、力士の内で大乱闘となる。そこへ喜三郎が駆けつけ、町奉行と寺社奉行の出役をしらせ、勝敗なしに両者の手をひかせる。

籠かご釣つる瓶べ花さ街との醉えい醒ざめ

序幕

吉原夜桜見初の場

役名

—	佐野次郎左衛門
—	同 下男治六
—	立花屋長兵衛
—	白倉屋万八
—	地廻り四人
—	若い者四人
—	兵庫屋八橋
—	同 九重
—	番頭新造重の井
—	同 八重咲
—	新造 七越
—	同 初菊
—	かむろ 四人

一 遊里やさかり場などを、いつもうろうろしている常連。
 二 おいらんの傍にいて一切の世話をする遊女。多くは主家からつけられ、廊になれた年増の遊女がこれにあたる。
 三 吉原の遊廊で、自分の部屋をもたず姉女郎に付属している妹女郎。
 四 おいらんの世話をする七歳から十二、三歳までの少女。

- (本舞台、一面の平舞台。正面に青竹の手摺、所々に朝顔のぼんぼり付。この内一面の桜の立木、うしろ奥深に仲の町の茶屋、灯入りの書割よろしく、すべて吉原夜桜の模様。こゝに地廻りの仕出し四人立ちかゝり、二挺鼓太鼓入りのさわぎ唄にて幕明く)
- これさ、この中へくり込んで、只帰るやつがあるものか。
- △ 銭がなけりやアねえように、西河岸へでも押上ろう。
- あしたの朝まで割前をかしてくれるなら、いやとはいわねえ。
- 帰りにえ事はちつともねえが、実は二人とも文なしだ。
- × 女郎買の割前ばかりやあ、あとになつちやアとれねえものだ。
- 銭がなけりやア仕方がねえ、徒党をもれて早く帰れ。
- △ 色にはなまじ、連れは邪魔だ。はぶいてくれりやア有難え。
- 馴染の所へ押し上り、あいつに達引かして遊んで帰えろう。
- × 誰れが手めえ達に達引くものか。
- 又居残りにでもなるのだろう。
- △ いゝ人に取りやア、女の方で達引くのはあたりめえだ。
- 徒党をもれたいゝ人連は、馬鹿にかまわず早くこい。

五 〇用語集

六 〇用語集

七 書割の背景の提灯や障子の部分だけ紙張りとし、裏からロウソクなどの光をあてて、夜の景を見せるもの。

八 〇用語集

九 遊里やさかり場などへ常に入りする者。

二 〇用語集

二 遊里の揚屋の賑わいを表現した歌舞伎下座音楽。大小鼓、太鼓、三味線、唄が入る。

三 吉原の京町一丁目どぶぎわの河岸見世をいう。五十文、百文の下級の女郎がいた。

三 割当て。

四 党を結んだもの。ある事をもくろむために集った仲間。

五 義理を立てること。この場合遊女に遊ぶ費用を出させること。

六 遊里などで、遊びの勘定が不足のため、連中の一人が人質となつて娼家に残ること。

(ト□×は橋懸りへ入る)

○△ コレ色気違ひめ、待ちやアがれ。

(ト追いかけて入る。右鳴物にて向うより、引手茶屋白倉屋の若い者

万八先に立ち、あとより次郎左衛門旅形、絹商人のこしらえ、治六同

じく旅形にて、両掛の前をかつぎ出て来り、花道にて)

万八 モシ、お二人さん、これが吉原の仲の町で、今潜ったのが大門口、な

んと立派でござりましょうが。

次郎 江戸の吉原という所は、はなしには聞いていましたが、こんな立派な

所とは、今まで知らずにおりました。

治六 わしも初めて来てみたが、あんたる事だと、たまげました。

万八 竜宮の乙姫さまか、生きた弁天さまを見るような、美しいおいらんを

抱いてお寝かし申しまして、旅籠屋並の宿錢で、お賄い申すのは、ほんの

今夜は御縁つなぎ、儲つくではございません。

次郎 イヤく、ほんの見物にこゝへ廻つて来たのだから、見さえすればこ

れからすぐに定宿へ行きますから、決してそれには及びませぬ。

治六 二十里からの道があるき、今日はえらくつかれたから、ちつとも早く

泊まりへ着いて、飯をくつて寝とうござる。

一 〇用語集

二 吉原や岡場所で、客を娼家に案内する茶屋。吉原では仲之町、揚屋町に約百二十軒の茶屋があった。

三 たびの服装。

四 江戸時代の旅行用の行李の一種。これに衣服、必要な品を入れて、胸と背に振り分けにしていた。

五 吉原中央、大門より水道尻まで通じる大通り。右側は江戸町一丁目、揚屋町、京町一丁目、左側

は江戸町二丁目、角町、京町二丁目と並ぶ最も賑やかな通り。三月

にはここに桜の木が植えこまれる。

六 新吉原の入口にある門。

七 びつくりした。

八 部屋持ち以上の上級の遊女。

九 宿屋。

二 宿屋の宿泊料。

二 いつもきまつて宿泊する宿屋。

万八 そんな事をおっしゃらずと、旅籠はたご並ならようござりましようから、兎も角も手前の店までお出になつてごろうじませ。

(ト右鳴物にて舞台へ来る。この以前向うより立花屋長兵衛、羽織着流しにて駒下駄こまげをはき、茶屋の亭主にて出て、茶屋にてこの体を伺いて思い入れあつて舞台へ来り)

長兵 オイく、万八、ちよつと待ちねえ。

(ト声をかける。万八振り返りみて)

万八 立花屋の親方さん、何ぞ御用でござりますか。

長兵 今うしろで聞いていれば、旅籠屋はたごやの宿錢やどせん並でこの衆達を遊ばせるとい
うが、いったいいくらで遊ばせるのだ。

万八 モシく親方、何もかも御存じのくせに、あとでおはやつけますか
ら、どうぞ見ぬ顔して下さいませ。

長兵 イヤ見ぬ顔をしちゃアいられぬ。土手先どてさきあたりへ出張つていて、勝手を知らぬ客と見ると、うそ八百で廓いっぴなへ連れ込み、悪玉仲間となれあつて金をむさぼるおめえ達、悪い風儀ふうぎの止むようにと、会所かいしよからも茶屋仲間へ、厳度出ている言渡いわたしだ。どこへおめえは連れ込む気か。おれがいっしよに行こうから、そのつもりで案内しろ。

三 袴をつけないで、着物だけのくだけた身なり。

三 下駄の一種。台、齒ともに一つの木材から刳くつてつくつたもの。

四 ありさま。

五 多勢の人々。

六 吉原へゆく山谷堀の土手。日本堤、吉原土手、土手八丁ともいう。

七 吉原の別称。

八 悪い仲間。

九 風俗、気風。

三〇 吉原の遊廓内の管理をする番所。